

p6

言語を持っていることは、ほかのいかなる属性よりも人間をほかの動物と区別する属性である。人間性を理解するためには人間を人間たらしめている言語を理解しなければならない。多くの国民の神話や宗教に示されている哲学によると人間の生活と力の源となるのは言語である。アフリカ人のある人々にとっては、新生児は *kuntu*, つまり物であり、まだ *munku*, 人間ではない。言語を学ぶという行為によってのみ子供が人間になるのである。それゆえこの伝統に倣えば、我々全員は少なくとも 1 つの言語を知っているという理由で人間になるのである。しかし単語を「知っている」とは何を意味するのであろうか？

単語を知っていると、あなたはその言語を知っている他人と話をすること、理解してもらうことができる。このことは特定の意味をあらわす音を発声できる能力と、他人によって発声された音を理解または解釈できる能力を持っていることを意味する。ここで我々は普通に耳が聞こえる人について言及している。耳が聞こえない人々はちょうど聴覚正常者が話し言葉を発し理解できるのと同様に手話言語を発し、理解することができるのである。

p7

皆は言語を知っている。なぜあまりに単純に見えるような現象について丸々1冊の本を書くのだろうか。結局のところ 5 歳の子供は彼らの両親とほとんど同じくらい言語を話したり理解したりすることに熟練している。しかし最も単純な会話を行う能力は話者が無自覚の深い知識を要求する。これは日本語話者にも英語話者にもエスキモー語もナヴァホ語にも当てはまる。我々が何らかのことを無意識に知っているかもしれないということは言語に特有のものではない。英語の話者は以下のような 2 つの関係詞がある文を関係詞が何であるかを知らずして発することができる。

My goddaughter who lives in Sweden is named Disa, which was the name of a Viking queen.

(私のスウェーデンに住む名付け娘の名前は *Disa* で、その名前はバイキングの女王にちなんでいる。)

これは人が歩くことを可能にしている神経生理的制御機構を理解したり説明できたりしないのにどうやって歩くかを知っているということと似ている。

それではもし英語かケチュア語かフランス語かモホーク語かアラビア語を知っているな

らば、何を知っているのだろうか。

おそらくそのことに気づくことなしに自分の言語の一部でない音だけでなくそうである音も同様に知っている。この知識はよくある言語の話者が他の言語の単語を発音するという方法で明らかになる。たとえばもしあなたが英語しか話さないのであればあなたは「外国」の単語を発音するときに、英語にない音を英語の音で代用してしまうかもしれないし、たいていそうする。どれくらい多くの人が **bach** の最後の **k** を伴って発音するのか。これはドイツ語の発音ではない。ドイツ語で **ch** の文字で表される音は英語の音ではないのだ。もしあなたがそれをドイツ人がするように発音したならばあなたは英語の音声体系外の音を使っているのである。あなたは英語を話すフランス人がたいてい **this** や **that** といった単語をまるで **zis** や **zat** と綴られたかのように発音するのを知っているだろうか。なえなら文頭が **th** の文字で表される英語の音はフランス語の音声体系の一部ではないからであり、フランス人の誤った発音から話者この事実に対する暗黙知が明らかになる。

p8

ある言語の音声パターンを知っていることはどの音で単語が始まるか、どの音で終わるかそしてそれらが互いにどう続いていくかを知っていることも含む。ガーナの元大統領の名前は **Nkrumah** であった。ガーナ人はこの名前の初めを英単語の **sing** の終わりの音(ほとんどのアメリカ人がそうする)と同一の音で発音する。しかし英語の話者は **n** の前後に短い母音を挿入することで(ガーナ人の基準によると)誤って発音する。同様に **Ngaio Marsh** というオーストラリアの推理小説作家の名前もこのように誤って発音される。ここに、これらの”誤り”よい例がある。英単語で **ng** の音で始まるものはないのである。英語を学ぶ子供はガーナ人やオーストラリアのアボリジニの子供が彼らの言語には **ng** の音で始まる音があるかもしれないということを学ぶのと同様に英語についてのこの事実を発見する。

p9

ある言語における音や音のパターンの知識は我々の言語知識のたった一部を構成しているに過ぎない。言語を知っているということの最も重要な部分はある音または音節は異なった概念、または「意味」を示す、あるいは表すことを知っている、ということである。つまり、もしあなたが英語を知っているならばあなたは **boy** は **toy**, **girl**, **pterodactyl** とは違う何かであることを知っているということである。それゆえ言語を知っていることは音と意味とを結びつける体系を知っているということである。もしあなたがある言語を知らなければあなたに話された音は(知っている場合より)ずっと理解しかねるものであろう。なぜなら会話での音とそれが表わす意味との関係はその大部分が恣意的なものだからである。

(あなたが言語を習得するとき、)あなたは **house** とあらわされている音(書き言葉で書かれている)が「家」という概念を示すということを学ばなければならない。あなたがフランス語を知っているならばその同じ「家を表す」ものは **maison** とあらわされる、ツウィ語を知っているならばそれは「」(←書けなかった)、ロシア語を知っているならば **dom** で、スペイン語を知っているならば **casa** で表されるものが「家」を表すということを学ばなければならないということだ。(この辺は訳の都合上付け加えた。)

この、話し言葉におけるある単語の形(音)と意味との恣意的な関係はまた耳の聞こえない人が使う手話にも当てはまる。このことは簡単に証明できる。もしあなたがテレビの音を消して手話の翻訳者を見るならば、(もちろんあなたがアメリカ式手話または手話英語を知っている場合を除いて)伝えられているメッセージを理解することはかなり疑わしいものとなるだろう。耳の聞こえない中国式手話の使い手は ASL の使い手を理解することは難しいだろう。もちろん多くの符号はそれらが表す意味を視覚的に模倣したものにその起源があるのかもしれない。つまりそれらは初めは模倣的(真似することに似ている)もしくは映像的(形と意味に恣意的な関係がない)だったのかもしれない。しかし符号は単語がそうであると同様に歴史的に変えられ、図象性は失われる。単語の意味を知っていることがその意味を知っていることを意味せず、手話における手の動きや形がジェスチャーの意味を意味しないのと同じような意味で、これらの符号は因習的なものとなる。

p10

それゆえ話し言葉と手話の意味を形成する言語の因習的、恣意的な性質は普遍的なものである。

しかし言語にはいくつかの「**sound symbolism**」がある。つまり発音がその意味を示唆する単語があるということだ。ほとんどの言語の単語の小さなグループは「擬音的」、つまり単語の音が単語の本質を「真似る」ということだ。この分野でさえも音は言語によって異なっており、言語の特定の音声体系を反映している。にわたりの鳴き声を英語では「**cockadoodledoo**」と言うが、ロシア語では「**kukuriku**」と言うのだ。

我々はある概念と関係があるように思われる特定の音節を見つける。英語においては **gl** で始まる単語の多くは **glare, glint, gleam, glitter, glossy, glaze, glance, glimmer, glimpse, glisten** のように視覚と関係がある。多くの韻を踏むペアの言葉は、**hoity-toity, harum-scarum, hosty-totsy, higgledy, piggedly** などのように **h** で始まる。しかしこれらは任意の言語のほんの小さな部分であり、**gl** は他の言語においては「**sight**」と関係がない

かもしれない。

p11

英語を知っているなら、これらの gl で始まる単語を、擬音語を、そしてその言語の基本的な語彙をすべて知っているのである。それらの音と意味も知っている。もちろん、あらゆる英語話者もウェブスター第3版に掲載されている45万の単語を知っているということは絶対にあり得ない。しかし仮に彼らがそうだとし、そしてそれが彼らの知っているすべてだとしても彼らは英語を知っているということにはならないだろう。辞書を買って単語を覚えることで外国語を習得しようとするのを想像してみてください。どんなに多くの単語を学んでも、英語でもっとも単純なフレーズや文を作ることはできないだろうし、ネイティブスピーカーが話したことを理解することはできないだろう。誰しも1つ1つの単語では話すことはできないのである。

ある言語を知っていると、フレーズを作るために単語を、文を作るためにフレーズを組み合わせることができる。残念なことに、任意の言語におけるすべての文が載っている辞書を買うことはできない。というのはいかなる辞書もその言語で可能な(作ることのできる)すべての文を載せることはできないからだ。言語を知っているとは、以前話されたことのない新しい文を作ることや以前聞いたことのない文を理解することができる、ということである。言語学者ノームチョムスキーはこの能力を言語使用における「創造的側面」の一部と述べている。これが意味するところは、ある言語のすべての話者は優れた文学作品を作ることができる、ということではなく、あなたとある言語を知っているすべての人が話すときは頻繁に新しい文を作ることができ、他人が作った新しい文を理解できる、ということである。なぜならば言語使用は刺激反応行動に限られたものではないからである。我々は内部の、あるいは外部の出来事や状態の制約から解放されている。もし誰かが我々のつま先を踏めば、我々は無意識に叫び声か喘ぎ声かうめき声を伴って反応するだろう。これらの音は実際言語の一部ではなく、それらは刺激に対する無意識の反応である。しかしながら私たちが自動的に声を発した後、私たちは「のろま野郎」もしくは「自分は象牙病じゃないかと恐れていたんだ。でも今、君のおかげで痛みを感じたから病気でないことがはっきりしたよ。踏んでくれてありがとう」もしくは無限にある文章の1つを口に出すでしょう。それは我々が口に出す特定の文書というのは刺激によってコントロールされているわけではないからである。

p12

実のところいくつかの無意識の叫び声は我々の言語体系に制約されており、会話の中で

間を埋める、er, un, you know のような言葉はしばしばある言語にしかない音を含む。たとえばフランス語話者は間を、卵を意味する oeuf という母音で始まる音で埋めるが、それは英語の単語、叫び声、間を埋める言葉には見られない。

もちろん言語を知っていることはまたさまざまな状況下でどんな文が適しているかを知っていることも意味する。イギリスの天候について話している最中、誰かがあなたのつま先を踏んだ直後に、「ハンバーガーは1ポンド2ドルかかる」と言うのは適切な反応ではないがそう言うことはできる。たとえば以下の文を考えてみなさい。

ダニエル・ブーンは開拓者となることに決めました。なぜなら彼には風の強いアメリカ中西部の平地でピンクのスカートで緑のベレー帽を身に付けた内股のキリンと寄り目の象がおどることを夢見ていたからである。

この文は信じられないかもしれない。その論理について疑問に思うかもしれない。それが違ったものを指す文章だと理解する可能性さえある。しかしその文章を以前聞いたことが読んだことがあるか非常に疑わしいものだとしても、あなたはその文を理解できる。

p13

あなたがある言語を知っていれば、あなたは新しい文を認識、理解、生み出すことができるということは明白である。それらのすべての文はダニエルブーンの本ほど「野蛮」である必要はない。事実、あなたが以前見たこと聞いたことのある文を数えながらこの本を読んだならば、その数はとても小さいだろうと予想する。エッセイや手紙を書くとき、試験で書くとき、どれくらいの文が新しいか分かるだろう。すべての可能な文を脳に蓄えること、話すときに状況に合うように思われる文を引き出すこと、聞くときに聞き取った文をすでに蓄えられている文と合致させることなどできるはずがない。いったい以前に聞いたことのないすべての新しい文を記憶として保持することができるのだろうか。(いや、できない。)

実を言うとある言語で作ることのできるすべての文を単純に記憶することは原理的に不可能である。もし言語のあらゆる文でより長い文を作ることができるのなら文の長さの制限はなく、文の数にも制限はない。このことは英語のある有名な例で説明することができる。英語を知っていれば、

This is the house.

This is the house that Jack built.

This is the malt that lay in the house that Jack built.

This is the dog that chased the cat that killed the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.

と言えることが分かる。そしてここ（この長さで）でとどまる必要はない。最も長い文はどのようなものなのだろうか。このように言うこともできる。

p14

The old man came.

The old, old, old, old, old man came.

何個の old が多すぎるのだろうか。7 個だろうか、23 個だろうか。われわれはこれらの文が長くなればなるほどそれらを聞いた可能性や言った可能性が低くなるということを否定しない。276 個の old を持った文は、話の中でも書くときにもかなりの確率で聞いたことはないだろう。それがメトセラのことを説明するものであってもだ。しかしそのような文は理論上はあり得るのである。つまり、英語を知っていれば形容詞を名詞の修飾語としていくらでも加えることができる知識を有するということになるのだ。

無限個の文を記憶し蓄積しておくためには無限の記憶容量を必要とするだろう。しかし脳は有限であり、仮にそうでなかったとしてもすべての真新しい文を蓄えることはできない。

しかし言語を学ぶ際、あなたは何かを学ばなければならず、その何かは有限であるに違いないものである。（どんなに豊富でも）語彙は有限であり、（ゆえに）それを蓄えることができる。もしある言語の文がひとつの単語を任意の順番で次々に並べることで作られるならば人間の言語知識は単なる単語のリストによって説明されるだろう。これが事実でないということは以下の単語のつながりを調べることでわかるだろう。

p15

もし「おかしい」だとか「よくない」と思われた例の前に “star” か*（アスタリスク）をつけるよう頼まれたなら、どれに “star” を付けるだろうか。英語において何が「正しく」て何が「正しくない」かに対する「直感的な」知識を持っていれば b と f と h に “saar”

をつけるだろう。あなたはどれに “star” をつけたらだろうか。

もしあなたがわれわれと同じ所に “star” をつけたなら、あらゆる単語の連なりが文章を構成できるわけではないということは明らかであり、言語のわれわれの知識により、どれがよい文章でないか決めるのである。したがって、言語の言葉を知ることに加え、文を形成するための、上の例について判断を下すためのいくつかの「規則」をしらなければならない。これらの規則は長さも数も有限であり、われわれの有限な脳に蓄えることができる。しかし上で議論されているようにそれらがあると無限個の新しい文を作ったり理解したりすることが可能になる。

全体の趣旨

言語を知っているということは単語や文をすべて知っているということではなく、それはいくつかの例から明らかである。言語を知っているとは単語だけでなく有限個の規則を知っているということであり、したがって言語習得の際にもそうしなければならない。(単語を知るだけでなく規則も知らなければならない。)